



山口県立大学附属図書館報

YPU Library

Library of Yamaguchi Prefectural University

第9号 平成20年(2008年)7月1日 発行



■ 巻頭言

附属図書館長 市村 孝雄

「図書館でタネ本探そうか」、「図書館で探し方聞こうよ」、「図書館ウェブで情報ゲットや」、「図書館のロビーで一服ね」、「じゃ5時に図書館で」、「今日は図書館で徹夜かも」・・・。こんな会話が飛び交うキャンパス。大学図書館は、そんなアメニティ空間であってほしい。それが、図書館に期待する学生のみなさんの本音なのでは？



これまでの大学図書館は、ひたすら原典を集め、目録ファイルを整え、情報蓄積に努めてきました。でも今や、誰もが検索ツールで情報のありかを見つけるネット時代。図書館は資料探しの最後に原典を手にする“蔵”。そしてそこは、情報探りに集まる人、資料探しを支援する人、自学自習に打ち込む人、自ら情報発信を始める人など、皆が出会い交差するコミュニケーションスペース。いわばキャンパスライフの“根城”、英米では”Learning Commons”とよぶ“学びとくつろぎの空間”！

さて、足元に目を向けると、地方の地域コミュニティに支えられて成り立つ県立大学の図書館がこの先どういう役割を担っていくのか、どんな環境づくりが必要なのか？やはり地方の公立大学である長崎県立シーボルト大学と熊本県立大学の図書館を一日訪ね、それぞれのお考えを伺ってきました。私たちの図書館の明日の姿を描くヒントをたくさんいただきました。日々利用する皆さんの声もたくさん聞かせていただけたら、なおありがたいです。鶴首！



(写真上) 長崎県立シーボルト大学のエントランスと、(写真下) 熊本県立大学の雑誌コーナーに、近未来のゆとり空間を見つけました。

■ 機関リポジトリへ 最初の一步

本年3月に刊行された「学術情報」創刊号を5月よりウェブ上で公開しました。CD版と全く同じ仕組みで表示させるため、サーバへの格納が手間取り、公開が遅れました。

「学術情報」は当館ホームページの紀要メニューからアクセスすることができますので、ご確認ください。併せて国立情報学研究所のCiNiiにリンクしたメニューを加え、本学紀要のアーカイブにもアクセスすることができます。

今後、これを機関リポジトリへ発展させるための準備を進めて行く予定です。

附属図書館	附属図書館
利用案内	
資料請求	■ 本学紀要
資料請求	
附属図書館 紀要	
YPU Library	山口県立大学学術情報 創刊号
本学紀要	
リンク	GNiP
図書館ガイダンス	
購入希望図書のリクエスト	

・次の、本学紀要アーカイブは、国立情報学研究所の「CiNii」へリンクしています。号数等ご確認のうえ、ご利用ください。

- 山口県立大学学術情報文化学術部紀要
- 山口県立大学社会福祉学部紀要
- 山口県立大学生体科学部研究報告
- 山口県立大学看護学部紀要
- 山口県立大学大学院紀要

(町田)

■ 図書館の自由と「ないものはない」図書館

国際文化学部 准教授 安光 裕子

- 第1 図書館は資料収集の自由を有する。
- 第2 図書館は資料提供の自由を有する。
- 第3 図書館は利用者の秘密を守る。
- 第4 図書館はすべての検閲に反対する。

図書館の自由が侵されるとき、われわれは団結して、あくまで自由を守る。

これは、「図書館の自由に関する宣言 1979 年改訂」(以下、「宣言」とする。)です。この「宣言」は、かつて図書館が国民に対する「思想善導」の機関として国民の知る自由を妨げる役割さえ果たした歴史的事実があることを背景に、1954 年に日本図書館協会全国大会で採択されたものです。

「宣言」が掲げているように、図書館には「資料収集の自由」と「資料提供の自由」とがあります。これは、図書館が国民の知る自由を保障する機関として国民のあらゆる資料要求に応えることを使命とするとともに、すべての図書館資料を国民の自由な利用に供されるよう取り扱うことも使命としていることを意味しています。

さて、「宣言」を読み返すごとに思い起こすエッセイがあります。それは、「ないものはない」という言葉をキーワードにして図書館のあるべき姿を述べた沼正也氏(中央大学名誉教授)の『「ないものはない」という論理』(『中央大学図書館報』65-8, 1965 年)です。

沼氏によると、「ないものはない」という言葉には二つの意味があります。『「ないものはない」というのは、ほんらい、『何でもある』の意である(略)が、『ないものは、いくら欲しくてもないものである。』という真理も、『ないものはない。』と表現されるのだ、というのです。

沼氏は、図書館の場において、後者の意味で「ないものはない」という言葉が使われる場合、利用者は、論文等の作成にあたって、本来見なければならぬ資料が図書館に所蔵されていないとき、それを見ることなく論文等を作成することにもなりかねないと述べています。こうしたことは、論文等の作成にあたり必要な資料を見なければならぬという論文作法に反することは言うまでもありません。図書館の場における後者の意味での「ないものはない」は、資料を見ることができなかった利用者の不幸にとどまらず、見るべき資料を見ないで作成された論文等を読む者にとっての不幸でもあると言えましょう。さらには、

「宣言」の言う「資料収集の自由」と「資料提供の自由」とに合致していないとも言えるのではないかと思います。

図書館の場において「ないものはない」という言葉が前者の意味で用いられた場合、図書館はどんな対応をすることになるのでしょうか。沼氏は、利用者が資料の有無を尋ねた時、即座に図書館員は「ある」と答えることになる、図書館に要求された資料が所蔵されていないときでさえ、図書館にとっては「ある」ということなのだと言っています。いかなる資料でも図書館が「ある」と言えるのは、利用者が必要とする資料を徹底的に探し出し提供することを図書館の方針としているからであり、この方針を採ることが図書館の本来あるべき姿であるというのです。図書館に「ある」としてすべての資料を提供することは、図書館に「資料収集の自由」と「資料提供の自由」とが保障されているからこそできることであり、またこれらの自由の実践でもあると思います。



ところで、最近この「宣言」をテーマとする有川浩『図書館戦争』(メディアワークス, 2006 年)が若者に人気を博し、アニメ化もされています。同書は、公序良俗を乱し人権を侵害する表現を取り締まる法律である「メディア良化法」が成立・施行された近未来の日本を舞台にして、「図書館の自由」を掲げ、不当な検閲から「本」を守ろうとする図書隊員の戦いを描いた小説です。これがエンターテインメントにとどまるのであればよいのですが、「宣言」がお題目化しているのならば、必ずしも荒唐無稽な話とも言えず、「図書館の自由」の否定が現実化しないともかぎりません。

一見些細なことのように思われる、「ないものはない」すなわち「何でもある」図書館の実現へ向けての不断の努力によって、図書館は、「図書館の自由」を享受し国民の知る自由を保障する機関となる道を進むことができると思われまます。

図書館が「宣言」を自分たちの行動原理として日々実践する努力によってはじめて、「図書館の自由」は現実化することになるのではないのでしょうか。

■ 附属図書館へ配属となって三ヶ月

附属図書館 主事 藤井 佳代

4月から山口県立大学に採用され、この附属図書館に配属となりました。私は3月まで別の大学に勤務していましたが、総務課での勤務経験がなく、司書資格もないため、当初はこの配属は何かの間違ひではないかと思ったほどです。また私の前任者は20年ここで働いてきた大ベテランだということを知り、自分がその人の後任として務まるのかと心配にもなりました。

実際図書館で勤務してみると、最初は図書館独特の専門用語が分からず、何のことを言っているのだろうという感じでした。例えば書誌って何？なぜ書庫は1階、2階、3階と言わず、1層、2層、3層と言うの？という感じです。以前勤務していた大学でも身近で図書館の仕事は見ていましたが、実際自分がやってみると、業務が多岐に渡ることには驚きました。図書の貸出・返却処理だけでも細かく様々なパターンがあり、覚えられるのかどうか不安でした。また最初は（今でもですが）図書に貼ってあるバーコードの読み取りも上手くいかず、学生の皆さんには迷惑をかけたと思います。しかしそれでも嫌な顔一つせず待っていてくれた学生には本当に感謝しています。

カウンターに座っていると学生から色々な質問が来ることにも驚きました。自分が学生の時はカウンターの職員に話しかけることはほとんどありませんでした。最初の頃は質問が来るたびに他の職員に訊いていたため、その都度待たせることになり、ここでもまた迷惑をかけたと思います。今でも質問に答えても、今の答え方で良かったのだろうか？司書課程を履修している学生の方が詳しいのでは？と悩む日々です。また後から他の人に訊いて、しまった！と思うこともあり、この場を借りて陳謝いたします。それでもどうか答えたことに「ありがとうございます。」と言われたときは安堵するとともに、もっと即座に的確に答えられるようにしなくてはと身の引き締まる思いです。

私自身、学生時代はレポートやプレゼンテーション課題、卒論・修論など、様々な場面で母校の図書館に大変お世話になりました。それが今、自分が大学図書館で働いていることを思うと不思議な感じがします。図書館での勤務は、全てが初めてで驚き、戸惑いの連続でもありますが、逆に初めてだからこそ、新鮮で面白い面も多く感じて

います。もちろん私がそう感じてここで働いているのは、他の図書館スタッフ始め、周りの皆さんのおかげであることは言うまでもありません。まだまだこれから勉強の日々ですが、学生の皆さんにパワーをもらいつつ、努力してゆきたいと思っています。



★ 学生スタッフの皆さんに選書していただきました。

最近新刊コーナーに並んでいる図書について、以前と変わった傾向の本が並んでいることにお気づきでしょうか？学生の皆さんにとっては親しみやすいと感じているのでしょうか？最近新刊コーナーに並んでいる図書の中には、2月に学生スタッフとして働いてくれた学生に選書してもらったものが含まれています。



このたびは皆さんに多くの図書を選書してもらいましたが、日頃から学生の方々が選書することは可能です。

当館には学生が図書館に入れて欲しい図書をリクエストできる制度があります。カウンター前にある筆記台にリクエストボックスがありますので、是非これを利用して読みたい図書を知らせてください。（但し千円未満のものや、問題集など、個人で購入した方がよいと思われるものについては希望に応じられない場合がありますのでご了承ください。）

選書では、どのような図書を選べば学生のためになるのか、また学生が喜ぶのか、と考える日々です。今回の学生スタッフの皆さんによる選書については、私も勉強になりました。是非ご協力をお願いします！

■ 報告 ScienceDirect の講習会を 開催しました!

エルゼビア社の電子ジャーナル「ScienceDirect (ヘルスサイエンス分野)」をもっと使いこなしてもらおうため、6月11日(水)13時から14時まで、看護学部棟図書室で講習会を実施しました。

当日はエルゼビアから講師を招き、操作画面をスクリーンに写しながら説明を聞く、講義形式の講習会でしたが、教員16名(主に栄養・看護)、学生11名(栄養・看護・生活環境、大学院)の合計27名の参加があり、予想を上回る参加人数でした。



以下は講習会終了後におこなったアンケート結果の報告です。
<回答率 85.2% (27名中 23名の回答がありました)>

1) 講習会はなにで知りましたか?
「教員から紹介」された学生が8名、次いで「学内掲示板を見て」

という回答が6名ありました。

2) 普段よく文献検索はおこないますか?

「月数回」が7名、「あまりおこなわない」が6名と、あまり文献検索することがない人が全体の半数を占めました。

3) よく利用するデータベース検索ツールは?

(複数回答可)

「PubMed」が17名、次いで「Google」が8名、「OPAC(学内蔵書検索)」が4名、「ScienceDirect」はなんと!0名でした。

4) ScienceDirect の使い勝手は?

「良い」が3名、「悪い」はおらず、「まだよくわからない」が17名でした。これは実習形式でなかったため、実感がわかかなかったのではと思われます。



5) ScienceDirect で
気に入った点は?

(複数回答可)

「使い勝手」が9名、「検索機能」が8名、「引用機能」が6名などとなりました。

● 集計結果から

今回の講習会は「講義形式」であったため、使い勝手がわからないという意見(17名)が大半でした。しかしその意見の内に、今後は「よく使う」が4名、「ときどき使う」が12名という回答を得られ、今後 ScienceDirect を使っていくとする意志の感じられる意見が16名あったことから、今回の講習会開催は意義があったのではないかと思います。

講習会にご参加いただきました皆様、どうもありがとうございました。

(窪田)

◆ 編集後記

ずっと以前から気づいていたことですが、附属図書館入口前から中庭方面を望むと、すぐ前に、ライオンの横顔に見える石があります。他の角度からは、どう見てもただの庭石です。

真夏のライオンとか、朝日を浴びるライオンとか、雨の日のライオンとか色々な表情が見られますので紹介します。

さて、新人職員の原稿も掲載した「館報」最新号をお届けします。

(町田)



■ 編集・発行/山口県立大学附属図書館

〒753-8502 山口市桜畠3-2-1

TEL. (083)928-0522 FAX. (083)928-0279

E-mail: lib@sakura3.yamaguchi-pu.ac.jp

http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/index.php?M_ID=9